放眼日中

深刻な中国のゴミ問題

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

中国の南部広東省の省都、広州は「食在広州（食は広州にあり）」と言われるほどの食い倒れの街である。その美味しさは高級フカヒレ料理から、飲茶、そして道端の屋台の粥麺まで、日本人も満足できる味と言って良い。

広州の旧市街では、全中国からやってきた観光客が食べ歩きを楽しんでいる。夜の12時でも鶏肉を焼く煙が立ち込める屋台、人々が風に吹かれながらビールを飲む光景は誠に好ましいと思われるが、その一方で道を歩く際には足元にかなり注意を払う必要がある。道路がゴミだらけなのだ。しかもそのゴミを流すためか、水が撒かれ、道路脇はゴミの山と水浸し、歩きにくいことこの上ない。食べ歩きをする人々の中には、躊躇なくゴミをポイ捨てする人が少なくない。歩きたばこも多く、その吸い殻も捨てられている。ただでさえ人が多く歩いているので、ゴミを避けて人が道路に溢れて交通の妨げにもなっているし、何よりも危ない。そして悪臭が漂い、せっかくの美味しい食べ物も味が半減する。

一方、広東省の隣の広西壮族自治区にある北海。ここはベトナム国境に近い港町であり、最近は中国の東北地方などから移住してくる人々で賑わっている。ここの売り物は何といっても「新鮮な空気」と「青い空」である。北京に住む中国の友人がここにマンションを購入したが、彼によれば「私は北海にマンションを買ったというより、ここの環境、ここのいい空気を買ったと思っている」という。確かに北京や上海などの空気の悪さは、既に我慢の限界を超えている。

彼らと一緒にサイクリングを楽しんでいると気持ちも良く、「本当に素晴らしい所だな」と感じたのだが、ある日一人でこの街を歩いてみると、眉をひそめる光景を目にした。街中にゴミの山が溢れており、かなりの悪臭がするのである。北海はここ数年で急速に移住者が増え、従来の人口30万人が今では2倍以上に膨れ上がっている。「新鮮な空気を買ったが、同時に悪臭も買ってしまったのでは」と友人をからかってしまった。

広州のタクシー運転手が「妹も弟も日本へ旅行に行ったが、皆そろって東京の街がいかにきれいかを語っていた。自分も一度この目で見てみたい」と言っていたのは広州人の実感だろう。筆者が「日本では今や自分の出したゴミは自分の家に持ち帰り処理する」と説明すると、信じられないという顔をして「もし道にゴミを捨てたら、日本ではいくら罰金を取られるんだ」と真顔で聞いてきたので思わず笑ってしまった。

この話をもって、日中の民度の差などを語るつもりは毛頭ない。ただ中国の場合、急速な経済発展の陰でゴミ処理のシステムなどが全く追い付いていないと言わざるを得ない。もちろん背景には、権利意識の高まった住民によるゴミ処理施設の建設反対運動もある。巨大な人口を持つ中国では、一般庶民のゴミに対する意識を変えるのに相当の時間がかかる。早急に意識を変革しないと、大気汚染、水質汚染ばかりでなく、道端にゴミの山ができ、人々の日々の生活がますます圧迫されていくことは明らかである。